

被災地派遣レポート〈第2回〉

■陸前高田において医療班に参加して

墨東病院看護部 花籠 香さん
(医療救護班)

3月29日東北道一関インターをおり、私たちは東京都の医療救護班として陸前高田に向かいました。道すがら眺める風景は地震があったのかと思うほどのどかでしたが、ある地点から景色は一変しました。道路こそ通行できるまでになっていましたが、屋根だけの家・ねじ曲がった線路・めくれ上がったアスファルト・そして一面の瓦礫の山。高田松原は日本百景にも選ばれている場所ですが、ここに何があったかわからないほどの光景が広がっていました。



私たちは陸前高田の医療拠点本部である米崎コミュニケーションセンターに入りました。ここには全国からの医療班・薬剤師・保健師が結集し、薬品や医療物品も揃っています。

私たち東京都班は、高寿園という特別養護老人ホームで、先陣より診療所を引き継ぎ外来診療を行うことになりました。高寿園には130名の入所者がいて、そこに300名ほどの被災者が避難しています。毎日約30名が診療所を訪れましたが、津波で流されて薬がない、発熱などの風邪症状、高血圧、眠れないなどの症状を訴える方々がほとんどでした。また高齢者が多い避難所では、インフルエンザや感染性胃腸炎などの感染症のアウトブレイクは、絶対避けなければなりません。断水が続く環境で対策を講じていくことも今回のミッションの一つでした。従事期間中2名のインフルエンザ患者がでましたが、隔離や予防内服によって新たな感染者はせず、ほっとしました。

また震災後働き続けている職員に対しても、なるべく受診してもらうように働きかけました。現地の職員は被災者でもあり、疲弊している様子でした。48時間勤務を終えては、少しの合い間に自分の家族の捜索にあて、また勤務という生活を送っているのです。発熱を主訴に診療所に来てくれた職員に対して「ゆっくり休んでください」と容易には口にできない現実がありました。「気力だけです」と笑って仕事に戻る職員の方々の姿を見送るしか私たちにはできず、どれほど「夜勤替わるよ」と声をかけたかったことでしょう。



災害時には災害サイクルに応じた医療・看護支援が必要といわれています。高寿園では寝たきりの入所者が多い中、褥瘡がある人は一人もいなかったそうですが、震災後褥瘡ができてしまったことを看護師はすごく悔んでいました。現在、被災地は災害サイクルにおける亜急性期にあり、感染症対策や精神的支援が必要です。そのためには、マンパワーの確保が欠かせません。東京都は大きな自治体で

あり、今後もリーダーシップを発揮しながら細くても長い支援を続けてほしいと思います。

最後になりますが、今回の派遣で一番重要な仕事と感じたのは「災害医療ロジステックス」といわれる業務です。災害現場において医師・看護師の医療業務を全面的にサポートしていくことに加え、現地スタッフとの調整、どこにどれだけの支援が必要か見極める重要な仕事です。今回、福祉保健局の方々が勤められましたが、(たぶん)慣れない業務の中、真摯にサポートしていただき感謝しています。医療にたずさわるものは皆誰かのためにと思いを抱いている人ばかりです。ぜひ、今後も私たちが有効活用して、支援を続けていっていただきたいと思います。